

●全国の愛好者が来訪

県指定史跡の日向国分寺跡に、一九九六（平成八）年四月、木喰五智館が設置された。東西十四^畳、奥行き十^畳の平屋建て。内部は大きく二分され、奥の方に五智如来像を安置した細長い基壇が造られている。

入り口の両側にはかつて東門にあったといわれる仁王の石像が立っている。この仁王像は享保十三（一七二八）年、清武郷の仏師・平賀快然の作である。

日向国分寺は八世紀半ばの奈良時代に、西都市三宅に建立された。その後、平安期の荘園化、さらに鎌倉時代以降の武家社会になってから、衰退の一途をたどった。

江戸時代の天明八（一七八八）年、廻（かい）国修行の僧・木喰（もくじき）上人が国分寺に立ち寄ったとき、住職になるように請われ、寺の復興に取り組むことになった。ところが三年

目に出血に遭い、堂宇いっさいが炎上した。上人は国分寺再建の大願を立て、まず大きな五智如来像を彫刻することを決意、クスの大木を近くの稚子ヶ池に浮かべて刻み始めた。

五体の五智如来像は、寛政四（一七九二）年から五カ年をかけて作像されたようである。すべて高さ三^畳前後。クスの寄せ木造りで、館内に並んでいる如来像は正面の中心に「大日如来像」、その右側に「阿弥陀如来像」「釈迦如来像」、左側に「薬師如来像」「宝生如来像」と並ぶ。宝生如来像の背面には「クハン世イ四子ノ八月十五日作木喰」の刻銘。クハン世は寛政のことである。

五智如来像のうち大日如来像の顔だけが角張っている。こうした顔付きは、縄文系統の日向土着人の顔に類似しているが、古代からの三宅の住民の顔とも思われる。

おそらく上人が寺の再建と如来像の彫刻に汗を流しているとき、毎日のように三宅の住民が手伝いに訪れた。上人はその住民の顔の印象をとらえ、如来像を刻んだのであろう。

上人は九十三歳で亡くなるまで、千体以上の仏像を刻んだが、五智如来像ほどの大型のものはほかにはない。上人の本領は、日向国分寺の仏像彫刻の時期に、最も強く燃焼していたと思われる。

五智館は見事なひのき造りで、西都市の人々の木喰上人への敬慕の情がこれを完成させた。現在では全国の上人の愛好者がここを訪れる。近所の住民も館を守り、来訪者を温かく迎えている。西都原古墳群とともに、西都市が誇る文化遺産である。



五智如来像。木喰上人の像彫刻に寄せる思いが伝わる